

儒教思想の日本における変容
——熊沢蕃山の思想研究

儒家思想在日本的变化

——熊泽蕃山的思想研究

闫 苗 著

大连理工大学出版社

はしがき

大学で日本語の勉強をはじめたときから、日本文化の特質とは何かという一つの漠然とした問題意識に悩まされていた。その解決を求めようと、北京外国語学院における日本学研究センターに入り、日本社会・文化を学んでいた。まもなくそこで学んだものにも隔靴搔痒の感じがあって、一国民を理解するには、その哲学や思想のようなものから理解しなくてはならないと悟った。そこで、日本思想史をやろうということで、早稲田大学大学院文学研究科東洋哲学専攻に入って、土田健次郎教授に師事して、江戸儒学を勉強することになった。

先生のご指導のもとで、修士課程をへて博士課程を終えたが、その間、藤原惺窩と林羅山を研究したあと取り上げたのは、熊沢蕃山であった。蕃山を検討している段階で、日本思想史学界の先生方の注目するところとなり、たびたび研究発表の機会が与えられた。本書の第二章と第三章、または第八章における主な内容は、それぞれ日本思想史学会平成十年度（1998）、十一年度（2000）と十二年度（2001）大会で発表させていただいた。よって、この研究の骨組みとなるところは、すでに日本思想史界で認められたかと思う。

日本での勉学の総決算となる本書で取り扱った対象は、江戸初期の代表的な儒者のその一経書に限られているので、日本文化の特質が何なのかという念願の達成まではまだ程遠い

といえなければならぬ。しかしながら蕃山の『周易』解釈のなかには、その思想全体を貫く要素だけでなく、江戸時代多くの儒者たちにも共通して見られる思想的要素が含まれているので、本書は、一冊の経書の研究や一人の儒者の研究にとどまらず、江戸儒者の思想的本質、ひいては日本文化への理解にもヒントを与えるものになろうかと思う。

本書の原稿は、土田健次郎先生はじめ、早稲田大学東洋哲学研究室の岩田孝教授、大久保良峻教授、小林正美教授、福井文雅教授、吉原浩人教授のご指導のもとで書き上げられた。また、日本留学中、東京大学文学部教授佐藤慎一先生、溝口雄三先生、東海大学文学部教授田尻祐一郎先生、恵泉女学園大学人文学部教授澤井啓一先生、東京大学法学部教授渡辺浩先生にも多大な学恩を受けていた。上述の先生方、とくに土田先生を抜きにしては、僕の日本思想史研究はとて思えられない。あらためて、先生および先生方に心からお礼を申し上げたい。

なお本書の出版にあたり、大連理工大学出版社日本語図書企画部主任の宋錦繡先生に、重ねて感謝の意を表したい。先生の大いなる協力と的確な指示がなければ、本書の出版は挫折または遅延の運命をたどっていたかもしれない。

2007年秋 筆者

目次

序論	9
----------	---

第一部 熊沢蕃山の生涯

第一章 悲劇の蕃山

第一節 直情の少年	23
第二節 有為の青年	27
第三節 多難の中年	44
第四節 孤独な晩年	54

第二部 熊沢蕃山の思想

第二章 太極をキーワードに

第一節 朱熹の太極	58
(1) 無性の太極	58
(2) 動静しない太極	62
第二節 蕃山の太極	66
(1) 有性の太極——至誠・無息	66
(2) 中庸の天道における至誠・無息	71
(3) 中庸の人道における至誠・無息	76

第三節 蕃山の性	82
(1) 至誠・無息の性	82
(2) 性の至誠——好悪の無さ	85
(3) 性の無息——職分における勤動	88
第四節 朱熹の性——仁義礼智	92

第三章 陰陽をキーワードに

第一節 朱熹の陰陽	101
(1) 推行を運動形式とする陰陽	101
(2) 相尅・相勝を常態とする陰陽の関係	103
(3) 善悪・主従のある陰陽	105
(4) 善悪・主従の相対性	107
第二節 蕃山の陰陽	111
(1) 皆善の陰陽	111
(2) 相求・相生・不相害の関係で並行する陰陽	114
(3) 中庸における不相害と並行	116
(4) 主従を絶対とする陰陽	118
第三節 蕃山の命	122
(1) 順逆の命	122
(2) 命と皆善・並行・不相害・相求・相生・主従	127
(3) 命の人工性	133
第四節 朱熹の命	136
(1) 仁義礼智と富貴貧賤の命	136
(2) 富貴貧賤の命の自然性	138
(3) 富貴貧賤の命の相対性	140

第四章 易簡をキーワードに	
第一節 朱熹の易簡	145
(1) 徳行の易簡	145
(2) 易簡——安易さ、気楽さ、呑気さ	147
(3) 易簡と知行	150
第二節 蕃山の易簡——事物の簡略さ、簡単さ、簡易さ	154
第五章 無為をキーワードに	
第一節 朱熹の無為——仁義のため	157
第二節 蕃山の無為——時所位のため	159
第二部のまとめ	168

第三部 蕃山思想の周辺

第六章 蕃山の現実認識	
第一節 多欲の精神的現実	175
第二節 太極・陰陽と心法	184
第三節 困窮の経済的現実	189
第四節 罰多の政治的現実	196
第五節 無礼の社会的現実	201
第六節 易簡・無為と治道	208
第七章 蕃山の学界批判	
第一節 儒者への批判	212
第二節 仏者への批判	218
第三節 神道者への批判	222

第四節 藤樹学への批判	225
第八章 蕃山の思想形成	
第一節 心法・治道と周易	236
第二節 蕃山の学的方法	239
第三節 心法・治道と大道	246
第四節 蕃山の時処位思想	253
第五節 朱熹の時と位	265
第九章 蕃山思想の性格づけ	
第一節 従来の定説	272
第二節 蕃山思想の非朱子学性	275
第三節 蕃山思想の非陽明学性	281
第四節 蕃山思想の非老荘学性	290
第三部のまとめ	294
結論	301
注	318
参考文献	362

鸣 谢

感谢辽宁师范大学及辽宁师范大学外国语学院对本书出版工作的大力支持！

序 論

一 江戸儒学研究の現状

明治以降、江戸儒学の研究は、西洋の圧倒的な影響下に置かれていた。その方法は西洋から取り入れたものであり、その目的は日本の西洋との関係を証明しようとするものであったという意味の影響である。近代研究の始祖である井上哲次郎氏（1）から、江戸儒学研究に大きな足跡を残した丸山真男氏にいたるまで、多くの研究者はそうした影響から免れることはできなかった。

日本哲学史の構築を課題とする井上氏は、西欧哲学のカテゴリーをもって有名な三部作を著したが、その営みの根底には、西洋及び中国への対抗意識が働いていた（2）。井上氏の狙いは、日本を東洋における伝統的な文化的中心である中国に代わる新たな中心と位置づけしようとする上での日本の塑型への寄与であった。

その後、井上氏らの研究に対する反動が起きた。その反動者には村岡典嗣氏がある。ドイツの思潮に動機付けられたその『本居宣長』は、西欧文献学の方法が本居の基底にも横たわっているという想定の上に立って書かれた（3）。西欧文献学における方法論の萌芽を本居のなかに見出そうとしただけでなく、その萌芽の近代日本における開花の検証をも自身の課題としようとした。西欧文明に匹敵する何かを近代日

本に見出そうとする村岡氏の努力は、西洋への憧憬からであった。

井上氏らの研究に対する反動者には津田左右吉氏もある。学問を通じて現実に働きかけようとする熱情にかけては井上氏らに勝るとも劣らない津田氏は(4)、西欧人の著作に触発されて『文学に現はれたる我が国民思想の研究』を著した(5)。国民という西洋的観念の虜になった氏は、井上氏らのような国家主義に基づく研究のイデオロギー性は批判したものの、病的(6)なまでに中国文化を退けようとするその研究における、日本と西欧との親和性という確信のイデオロギー性に気付いていなかったらしい(7)。

一方、戦後の研究方向を決定づけたのは、『日本政治思想史研究』を著した丸山真男氏である。西欧の知識社会学を理論とする丸山氏のこの研究への理解においては、その冒頭に掲げられている、中国のことを「持続」の帝国とするヘーゲルの歴史哲学よりの抜粋が示唆的である(8)。江戸日本の思想における「発展」を創出することによって近代日本の現実における「発展」を理論付けようとする丸山氏であった。近代日本の現実における「発展」をあまりにも説明しようとした結果、氏の主観的意識が「氾濫」してしまった(9)。

その後、丸山氏の研究を潔しとしない研究者、尾藤正英氏や源了圓氏が立ち上がった。西欧の「自然法」で知的武装をした尾藤氏は、『日本封建思想史研究』をもって丸山氏に対抗した。朱子学が江戸の日本社会には本格的に受容されなかったというその基本的結論は、「本来対立すべき性格の」「絶対君主の政治的主体性と、国民一般のそれ」におけ

る「対立的契機の挫折」の解明を意図していた(10)。この意図の根底には、「西欧における政治理念の近代化は、その二つの契機の対立と葛藤の様相において進行した」という西欧モデルがあった。

一方、「極東文化圏の中で、なぜ日本の場合だけが西欧の近代文明の受容に比較的成功的だったのか」と問うた源氏は「古学の研究だけでは、われわれの疑問はとけない」(11)として、「明治以後の日本の近代化の性格を明らかにするために」『徳川合理思想の系譜』を書き上げた。尾藤氏ではその「自然法」という観念や西欧モデル、また源氏ではその「日本の近代化」への「疑問」などに象徴されているように、丸山氏に批判的な研究者でも、西洋の事情を自らの論拠とした点にかけては丸山氏と変わらなかった。

かくして日本の過去を素材とし西洋の理論を方法とした丸山氏をはじめ戦後の研究者も、江戸儒学において証明しようとしたのは、結局戦前のそれと同じく、日本と西洋との関係以外の何物でもなかったと考えられる。その結果、膨大な史料に対する徹底的な読解を行うことによって過去の儒者の思考構造を解明するという江戸儒学に内在する本来の目的が置き去りにされた一方で、西洋の理論というフィルタを通して選別された過去の史料をもって現在の日本が置かれている状況を説明しようという江戸儒学に外的なことを目的とする問題設定が蔓り、史料の内的論理の解明という客観的な研究ではなく、史料を研究者の問題意識を裏付ける材料としてしか扱おうとしないという主観的な研究が量産されてしまい、日本儒学研究には一つの「閉止域」(12)——独善的な世界が創出された(13)。労多くして功少なし(14)というのは、江戸儒学研究の現状であるといわざるをえない(15)。

二 熊沢蕃山研究の現状

現在、江戸儒学研究は、さまざまなテーマから色々な方法で考究されているが、筆者としては、熊沢蕃山（一六一九～九一）に焦点を絞りたい。蕃山をテーマとしたのは、彼に関する研究が、はやくも江戸時代から始められ今日まで続けられてきたにもかかわらず、その思想は必ずしも等身大に解明されていなかったように考えているからである。たとえば、蕃山の言説には、

- 気質のすぐれたる人にも、聖学なき世に生れて失有し事挙てかぞへ難し。今聖学ひらけたる時に生れてだに、易を学びざれば過多きもの也。（正宗敦夫編『蕃山全集』名著出版、昭和五五年。第四冊『易経小解』巻七、三九四頁。以下『蕃山全集』を表記する場合、たとえば上記の「第四冊『易経小解』」を単に「四『易経小解』」のようにする）
- 心友問。貴老、易と孝経とをならべ給へり。易は玄妙深遠・広大高明なる書なり。孝経は童子の始てならひまなぶ書の様にいへり。さればうたがひなきことあたはず。答えて云。言近くして旨遠きものは善言なりとは、孝経のたぐひなり。易は天地によつて道徳を發明し給ふ故に、其語勢幽遠なり。孝経は人倫にをいて道徳を教給ふ故に、其語勢親切なり。爰を以て、よく易をみる者は、近く身に取て親切に受用し、幽遠の事となさず。よく孝経を学ぶものは、詞の近きによつて幽深玄遠の旨をうしなはず、中和をいたして天地位し万物育するの極功、神聖の能事、こゝにある事をしれ

り。（『集義和書』巻八、一三四頁。後藤陽一ほか校注『日本思想大系30熊沢蕃山』岩波書店、一九七一。

なお、本書が使用する『集義和書（補）』『大学或問』も大系本による）

というのがある。多数の経書のなかでとくに『周易』と『孝経』が重視されていることが分かる。『周易』は道徳を明らかにする書であるのに対して、『孝経』はその道徳を教える書であるので、『孝経』よりも『周易』のほうが、蕃山の思想形成にあずかって力があつたことが分かる。これは、蕃山のほとんどの著書には『周易』の経文が敷衍されていることや、その代表的な著書『集義和書』の巻七が『周易・繫辞』に対する解釈によって構成されていること、またその十数点の経書解釈書のなかには、『易経小解』『八卦之図』『繫辞伝』といった『周易』関係のものが三点も入っているということからも伺えよう。蕃山思想の形成においては『周易』の影響はきわめて大きかったことが明らかである。

蕃山研究において、その『周易』解釈が重要であるということは、従来の研究者が知らないでもなかつた。蕃山研究にとっての『周易』の重要性は、早くも研究者の間で認知されていた。たとえば、江戸時代では『慕賢録』という蕃山の行状を記した書物のなかで、

○先生…聞江州有藤樹先生…乃往請受業…。於是日夜研精遂受孝経大学中庸。最精易。（六「付録・慕賢録」六四頁）

という蕃山の『周易』への造詣の深さが記されているし、戦前では、

○易と孝経は蕃山先生が最も思ひを深めて研究せられた書であって、…先生の著書にはいたる所に易が出てくるのは誰も気のつく事であらう。(四「解題」八頁)とあるように、『周易』と蕃山思想との並々ならぬ関係は、『蕃山全集』の編集者正宗敦夫氏によって指摘されている。

戦後では、和辻哲郎氏は、

○蕃山は人格神の信仰に対してよりも、むしろ易の理論に対して親近性を感じた人であるらしい。(『日本倫理思想史』下巻、岩波書店、昭和二七、四二九頁)と述べているし、牛尾春夫氏はその『中江藤樹・熊沢蕃山』において、

○蕃山の…思想の基本は易書…。(明德出版社、昭和五十三、二一七頁)

と書いている。さらに『増訂蕃山全集』の監修者宮崎道生氏は、蕃山研究の「今後の課題」として、

○五十歳以後の蕃山の心境を知らんがためには、『易経』の注釈書(『易経小解』ほか)を精査考究することが何よりも必要…。(『熊沢蕃山—人物・事績・思想』新人物往来社、一九九五、二〇四頁)

と唱えてもいる。

このように、いままでは、蕃山思想の『周易』との関係の重要性を指摘した言及は、決して少なくなかった。しかしながら、それにもかかわらず、蕃山の『周易』解釈が本格的に取り上げられた研究は、ついぞ見られなかった(16)。蕃山思想にとっての『周易』の重要性は知られていながら、『周易』との関係を通じて蕃山思想を検討しようという研究

は皆無であった。これが蕃山研究の現状であると言わなければならない。

英人日本思想史研究者マックマレン氏は、かつて、

○徳川初期の儒家の中で、熊沢蕃山は…おそらく最も問題の多い、そして未だ不十分にしか理解されていない存在である。蕃山には常にあるとらえどころのなさが付纏い、それは彼の人間像そのものとその思想の双方を覆っている。(J・マックマレン「熊沢蕃山」相良亨他編『江戸の思想家たち(上巻)』研究社、一九七九、六四頁)(17)

と指摘している。その言うところの「蕃山には常にあるとらえどころのなさが付纏い」という現象は、もしかしたら蕃山の『周易』解釈の未解明と深く関係しているのかもしれない。というのは、『周易』との関係の深い蕃山思想でありながら、『周易』を通じてそれを検討しない限り、蕃山の研究がいくら行われようとも、それは、つねに隔靴搔痒に終わってしまうしかないからである。筆者の、「熊沢蕃山の『周易』解釈」は、まさに上述した蕃山研究の現状に鑑みての結果である。

三 本書の研究方法

蕃山の『周易』解釈への考究において本書で取られる方法は、比較である。それは、比較が、たんに分析および総合、抽象および概括とともに思惟の基本的な方法の一つだからだけではない。また、それが江戸儒学という学問の性質から要請される方法でもあるからである。理由は次のとお

り。中国儒学を母体とする日本の江戸儒学は、江戸儒学として成り立つには、中国儒学には見られない何かの徴表を必要とする。この徴表は、中国儒学との比較を通してしか獲得できない。というのは、中国儒学を原形とし、江戸儒学をその変形とする場合、中国儒学という原形を視野におさめておかなければ、江戸儒学という変形の性質の同定はできないからである。中国儒学との比較は、江戸儒学の研究に必要不可欠な方法であるといわなければならない。

比較とは、同じ秩序の二つの事物の同一と差異を示すことにほかならないが、本書の場合、中国儒学と江戸儒学との両者における同一性は問題とせず、もっぱら両者間における差異性を示そうと試みる。何となれば、同一性の確認より、差異性の析出のほうが、より多くの知識を教えてくれるからである。これが、「朱熹との比較から見たるその独自性」という本書の副題が成立した所以である。

ところで、比較といっても、体系を通してのものあれば命題を通してのものもある。さらに概念を通してのものもある。体系としての比較は、抽象的にならざるを得ない故に精確さを欠くことが常である。外延が増大するに従ってその内包が減少することにより、高度な概括には虚偽が常に付きまとうからである。ましてや蕃山の思想はいまだに「とらえどころのなさが付纏」っている、いいかえれば一つの体系として描出されていないのだから、体系としての比較の行いようはない。よって本書では体系としての比較は取らない。

これに対し、命題を通しての比較は一つの選択肢として考えられる。しかしながら江戸儒学の場合、命題を通しての比較は必ずしも有効とはいえない。なぜなら江戸儒者の命題の

なかにはもっと説明されるべきものがつねに残っているからである。たとえば、蕃山の場合、

○有徳の人あれば、其化によりて、よき人余多出来るものにて候。徳は人のためにするにあらず。己一人、天理を存し人欲を去なり。人欲を去て天理を存するの工夫は、善をするより大なるはなく候。（『集義和書』巻一、二十頁）

とあるように、「天理を存し人欲を去なり」という宋学的な命題がここで敷衍されているが、これを根拠にしてただちに蕃山の思想を宋学的とすることはできない。なぜならば、宋学の天理は、

○性者、即天理也、万物稟而受之、無一理之不具。（『語類』巻五、第八八条）

○性中只有箇仁、義、禮、智四者而已。（『論語集注』巻一）

とあるように性としての仁義礼智であるのに対して、蕃山のそれは、

○士農工商は天命の自然也、逢に順てなすべし。（四『論語小解』一五九頁）

○天命は天理也。…士農工商の業も又しかり。天命にあらずと云ことなし。（四『論語小解』二三〇頁）

とあるように、士農工商の職業だからである。性を内容とする天理と職業を内容とする天理との間における差異はいかに大きいものなのか、多言を要すまい。蕃山における「天理を存し人欲を去なり」という命題を理解するには、天理とは何なのか、つまり概念の把握から始めなければならない。このように、同一の言明は必ずしも同一の内容を意味しないのだ